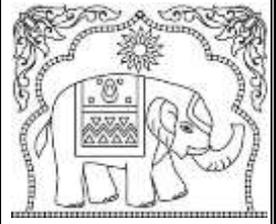


まいとりに मैत्री

No.16 平成 24 年度 春号 -2012. 4. 25-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌



< मैत्री > : maitri (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

《新年度挨拶ならびに総会報告》

この 4 月で東洋大学仏教青年会・仏教会の活動も五年目を迎えることとなりました。

昨年度もサンスクリット、チベット語、漢文の語学勉強会をはじめ様々な仏教行事への参加・体験をすることができました。夏期研修では先の大震災による福島原発事故の風評被害に苦しむ福島県会津地方の神社仏閣をめぐるしました。また、講師の石川美恵先生を中心に平成 21 年度から 22 年度にかけて行われたチベット語仏教文献講読会の成果として、校訂テキスト、和訳、単語帳を付したツォンカパ著『菩提道次第広論』‘菩薩道の修行階梯’より「菩提心の儀軌」の章 Part1 を発行致しました。今年度も勉強会や様々な仏教行事への参加、展覧会鑑賞などを通じ、普段の授業とは違った形で仏教に触れる機会を提供できる場となればと思っています。本年度も何とぞよろしくお願い申し上げます。



さて、去る 3 月 24 日に平成 23 年度東洋大学仏教会・仏教青年会総会・講演会が開かれました。会の前半では早稲田大学教授岩田孝先生 (早稲田大学仏教青年会会長) に、「無常について」というタイトルでご講演を頂きました。続く総会では写真を用いながら講演、展覧会鑑賞、仏教行事参加の活動報告、収支報告、予算報告、仏教会・仏青役員決定を行いました。

藤森晶子 (仏教青年会会長 大学院仏教学専攻博士後期課程 3 年)

昨年は東日本大震災のために、年度末の総会を急遽中止することになり、皆様方には大変ご迷惑をおかけしました。本年はおかげさまで旧来のように総会を開催し、新たな気持ちで活動を始めることとなりました。

東洋大学仏教会は学生メンバーである仏教青年会とともに活動しながら、様々な側面から仏教青年会を支えてゆく東洋大の卒業生、あるいは一般のメンバーからなる組織です。創立からこの目的は一貫していますが、五年目となって、仏教青年会のメンバーよりも大規模になってきました。この状況に対応するための活動方法も今後の課題と考えています。

円了先生の唱えた「活仏教」をモットーに、ともに歩んでゆきましょう。

渡辺章悟 (仏教会会長 文学部インド哲学科教授)

【目次】

新年度挨拶ならびに総会報告	……1	タイの仏教事情⑨	……6
仏青副会長挨拶	……2	コラム「日本文化と仏教」⑭	……7
台湾仏教の旅	……2	書籍・イベント情報	……9
モンゴル仏教文化圏の諸事情②	……4	今後の予定	……10
韓国滞在記②	……5		

《仏青副会長挨拶》

今年度の仏青副会長を務めさせていただきます櫻井宣明です。東洋大学仏教会・仏青は復興設立して四年を過ぎ、今年で五年目となります。設立当初に一年生だった仏青会員も今年の三月に卒業しました。設立準備や運営に携わってきた者として、第一期生である彼らを送り出すことができたことには感慨深いものがあります。彼らの社会生活において、仏青での経験が少しでも良い方向に導くことを願っています。思い起こすと仏青では様々な行事を行ってきましたが、やはり毎年夏の研修旅行は大切な思い出となっています。一年目は渡辺章悟先生のご実家である仁叟寺様に参籠しての群馬旅行、二年目は日光旅行、三年目はインドネシアのポロブドゥール旅行、四年目は会津・喜多方旅行と、様々な地に足を運びました。また日帰りの研修や語学勉強会、毎回趣向を凝らした忘年会など、大変に内容の充実したものでした。これらすべては、とても仏青だけでは出来得ないことであり、皆様の御助力に深く感謝申し上げます。

さて、大学では新年度を迎え、元気ある新入生に活力を受ける毎日を送っております。少しでも多くの学生に仏青の良さを知ってもらうよう、積極的に活動していきたいと思っております。また、平成23年度の総会において、以下のように新役員が決まりましたので報告させていただきます。本年も何卒、宜しく御願い申し上げます。

東洋大学仏教会

会長 渡辺章悟（文学部インド哲学科教授）
副会長 橋本泰元（文学部インド哲学科教授）
事務局長 岩井昌悟（文学部インド哲学科准教授）
幹事 山口しのぶ（文学部インド哲学科教授）
沼田一郎（文学部インド哲学科准教授）
出野尚紀（東洋学研究所奨励研究員）
監査 木村得玄（黄檗宗禅林寺住職）

東洋大学仏教青年会

会長 藤森晶子（大学院仏教学専攻博士後期課程3年）
副会長 櫻井宣明（大学院仏教学専攻博士後期課程3年）
藤井明（大学院インド哲学仏教学専攻博士前期課程1年）
幹事 鈴木伸幸（文学部インド哲学科4年）
鈴木洋志（文学部インド哲学科3年）

《台湾仏教の旅》

台湾のエンゲージドブディズム

3月12日から19日にかけて、「現代に生きる仏教」「仏教と社会福祉」の授業を担当する戸松義晴先生の紹介をいただき、インド哲学科の学生ら6人で台湾の台北と花蓮を訪れた。世界最大の仏教NGO団体と言われる慈済会が展開する医療福祉活動の取り組みを授業で学び、深く関心を抱いたことが旅行のきっかけである。今回は慈済会の経営する新店慈済医院と慈済会本部の静思堂（写真右）、慈済大学の解剖教室、慈済会唯一の寺院である慈済精舎を訪問した。さらに台湾大学病院に訪れて緩和ケア病棟での尼僧の取り組みに触れ、台湾仏教の四大本山の一つである法鼓山へ訪問する機会も得た。



慈済会の「慈済」とは「慈悲濟世」（慈悲の心でこの世をあまねく濟度する）を略したもので、この思想を押し広げて社会的実践を重視する。特に医療に重点を置いた活動が顕著で、さらに教育や文化事業にも積極的に関与している。世界各地で災害が起こった時にもいち早く慈済会は現地へ駆け支援の手を差し伸べる。

台北の新店慈済医院は高級ホテルのような豪華な作りとなっており、ロビーでは常に演奏会などがなされ、明るい雰囲気満ちていた。その明るさは緩和ケア病棟も同じで、死の間際にあっても人生の質を高める配慮が多

く見られた。花蓮では慈済大学医学部の解剖教室を見学した。ここでは献体者を「無語良師」と呼び、実習生らの手で葬儀の準備を行い、遺族と共にそれに参加し真摯に手を合わせるなどして、最大限に尊敬し感謝の意を表明する。献体者の遺骨は、実習棟内の明るく開放的で美しい納骨堂に納めてあった。花蓮郊外に位置する慈済精舎では、多くの尼僧たちが自給自足の共同生活を送っており、畑仕事や食品加工に精を出す姿が印象的であった。



一方、法鼓山は禅の修行により心のありかたを他者との関わりや、さらに自然への思いやりにまで広げることを目指す。慈済会が社会的行動を全面に主張するのと異なり内面の変革に重きを置くが、仏道修行を社会のありかたまで生かすという視点は同じものである。法鼓山は仏教学研究にも力を入れている。我々は法鼓山仏教学院の釈恵敏学長（写真右中央）と対談する機会を得て、サンスクリットの話で熱く語り合い有意義な一時を過ごすことができた。図書館も印象的で、入り口には世界各国の言語で記された「般若心経」が壁一面に張られている。中に入ると、圧倒的な仏教学・インド学関係の蔵書量に驚いた。

今回の旅行では慈済会ボランティアの方々には計画の段階から旅行が終わるまで大変お世話になり、慈済会の心の温もりを感じ続けた旅であった。このような素晴らしい旅行を紹介して下さった戸松先生と、お世話いただいたすべての慈済会関係者には心より感謝申し上げたい。

鈴木伸幸（インド哲学科4年）

緩和ケアの現場で仏教が担うこと

現代日本の仏教は葬式仏教と表現され、葬式や法事にお経を読みにくるというのが一般的な仏教者のあり方である。しかし、台湾の仏教はそれとは全く異なる。信仰が厚く国民が仏教者に期待するところも大きいため、その役割も様々であるのだ。

3月13日に私達インド哲学科学生ら6人は慈済会ボランティアの洪美恵さんに案内をいただいて台湾大学病院の緩和ケア病棟（ホスピス）を訪れた。ここでは国立病院であるにも関わらず、法師や牧師といった宗教者が緩和ケアチームの一員として、重要な役割を担っている。



緩和ケア病棟には医師、看護師、薬剤師、栄養士がいることは当然ながら、宗教師とそれを補佐するボランティアが常駐している。自らの死を前にして残りの人生をどう過ごすか悩み苦しむ患者にいかにして心理的・生理的ケアを施すか。この役割を担うのが宗教師とボランティアである。彼らが常駐することで、患者は仏教徒もキリスト教徒も毎日祈りをささげることができ、寄り添いながら話を聞いてもらうことで心の痛みを取り除くこともできる。また宗教者の役割として興味深いのは生死の教育を施すことである。

私達は現場で働く尼僧法師と懇談する機会を得た。法師曰く、死期が近づいた患者が最期の苦しみを乗り越えるためには、ステップを踏んで死を受け入れていくことが重要である。まず、医学的に治療可能な段階では、生命とは何かについて教育する。再入院をして治療が困難になった頃に、生と死の両面の教育を行う。死の間際になると、死とは何かについて教育を行い、死を乗り越えさせる手伝いをするのだそうだ。具体的には『チベット死者の書』の死生観を説くという。

台湾では宗教師の不足という問題があり、その足りない部分を専門的研修を修めたボランティアが補っている。

在宅看護の場にもボランティアは宗教師のかわりに参加している。ボランティアは患者の側にいて共に話し、よく話を聞くことが大切であるが、決して自分の考えは話してはいけない。話すのは法師の話した言葉だけであり、生死の問題などわからないことは法師に直接聞いてもらう。それは患者を安心させることが目的だと言う。

最後に、法師の先生が語った、印象深い一文を紹介しようと思う。

「生まれゆく時と死にゆく時は同じで、暗い所を歩いていくと明るい所に行く。生まれてくる胎児もこの世界を捨てたくないと泣くのです。」

杉崎希望(インド哲学科3年)



～モンゴル仏教文化圏の諸事情②～

—モンゴル国の仏教事情—

現在のモンゴル国に仏教が本格的に弘通したのは16世紀の後半である。現在モンゴル国の人口の大半を占めるハルハ・モンゴル族の当時の君主アバダイ・ハンが、ゴビ砂漠以南の漠南地域に広まりはじめたチベット仏教ゲルク派との接触したことから始まる。2004年にユネスコ世界文化遺産に登録され、元の都であったカラコルムにある遺跡を再利用したエルデニ・ゾー寺もモンゴル初の仏教寺院としてこの時期に造られた。その後、アバダイ・ハンの孫として生まれたザナバザルが活仏ジェブツンダンバー一世として認められ、ハルハ・モンゴル仏教界の最高指導者となった。ジェブツンダンバー一世は、17世紀にチベット仏教ゲルク派の信者であるハルハ・モンゴルの王子ザナバザルとして生まれ、その後チベット仏教チョナン派の学者ターラナータの転生者として認定された。

モンゴルにおける歴代の活仏はハルハ・モンゴル(現在のモンゴル国)地域を拠点に活動し続けた。ジェブツンダンバー一世を首長とするハルハ・モンゴルの人たちは1691年、西部モンゴルのオイラトの侵略を受け、清朝に保護を求めた。これによりジェブツンダンバはハルハ・モンゴルにおける指導者としての地位を確立した。20世紀に入ると清朝の対モンゴル保護対策は一変し、漢人入植制限を廃止した。1911年に中国国内で清朝打倒運動や辛亥革命が起こり、清朝が衰退していくのに乗じハルハ・モンゴルの当時の君主であった活仏ジェブツンダンバ八世は清朝からの独立を宣言した。ここにモンゴル初の活仏を元首とする教政一致の立憲君主制国家が誕生し、後にモンゴル国の独立に大きく貢献することとなった。1924年、ジェブツンダンバ八世の死去を契機にモンゴル国政府は社会主義政策を行い、1929年に政府は僧侶の選挙権を剥奪し、寺院が財産を持たぬよう寺院への課税額を増やし、結果その後の三十年間で課税額は四倍になった。さらに1937年から1939年にかけてはソ連のスターリズムをうけて政府は激しい宗教弾圧を行い、およそ13679名の僧侶が銃殺された。モンゴル国内にある771の仏教寺院の5000余りの建物は学校や病院などの公的機関に転用され、唯一、首都ウランバートルにあるガンダン寺のみが公式な仏教活動を行い宗教施設としての機能を保っていた。



ジェブツンダンバ九世

1990年の民主化によりモンゴル国内で宗教活動の自由が保証されると、多くの仏教寺院は本来の機能を取り戻し、宗教活動を再開し破壊された寺院の再建

が行われ始めた。また、1991年に「モンゴル仏教協会」が設立され国内の仏教寺院間のつながりを強化するとともに、海外の仏教協会とも盛んな国際交流をおこなっている。現在モンゴル国の国民の八割近くがなんらかの宗教を信仰している中、仏教を信仰する者は85%に達する。また、特筆すべきは1991年ダライ・ラマ十四世によって公式に認定された活仏ジェブツンダンバ九世(チベット生まれ)が1999年にははじめてのモンゴル訪問を実現した。その後2010年にジェブツンダンバ九世はモンゴル国籍を取得し、ついで2011年11月2日モンゴル政府はジェブツンダンバ九世を宗教指導者として公式に認定したが2012年3月1日入寂した。

オーダム (大学院仏教学専攻博士後期課程3年)

～韓国滞在記②～

一救仁寺訪問一

今回は、金剛大学の母胎である韓国天台宗の総本山、救仁寺(クインサ)についてご紹介しようと思います。私がある仏教文化研究所の先生方も、大学生たちも、天台宗と関わりを持つ人は多くありません。しかし、教職員には信者の方もおり、一応は宗派系の大学として、金剛大学では年に何度か天台宗に関連する行事が行われます。1月の旧正月後には、教職員が(所用のある者以外)全員そろって救仁寺へ初詣に出かける日が設定されていました。私もそこへ参加したので、その時の様子をお話しします。



救仁寺は大学の近くにはありません。金剛大学は韓国の西側にある忠清南道(チュンチョンナムド)というところにありますが、救仁寺はその隣の忠清北道(チュンチョンブクド)の、一番東の端にある丹陽という場所にあります。地図で見ただけであればわかりますが、韓半島の約半分を横断するようなかたちでの移動になります。大学の公式行事ということで、大学の校舎前からスクールバスで向かうのですが、出発時間はなんと朝の5時半、寺に到着したのは10時過ぎくらいでした。

今、韓国は春を迎え、日中の気温が20度を超える日も珍しくありません。しかし、1、2月の寒さは東北地方や北海道の一部にも匹敵するほどで、最高気温も連日零下です。その寒さの中、救仁寺には高僧の方々へ新年の挨拶をするべく、多くの信者の方々が集まっていました。日本と同様、韓国でも寺は山にあることが多く、救仁寺も例外ではありません。ただし、韓国の山は日本とは異なり、比較的低くて急な斜面をもっています。私は風邪を引いてはいけないと思い、厳重に防寒対策をしていたのですが、駐車場から寺の本堂までは、急な坂道がずっと続いており、本堂付近に到着した頃には、汗でびしょりになっていました。

韓国天台宗は近代になってから興隆したこともあり、救仁寺はコンクリートで建てられた巨大な伽藍が立ち並んでいて、海印寺などの古刹と比べると非常に華やかな印象を受けます(写真上)。しかし建築物は現代技術に依っていても、陸橋によって各伽藍が連結し合う様子は、昔の中国などの絵画に出てくる仙境の雰囲気似ているような気もしました。建物の上層階には、仏教関連の像が数体飾られているのも、日本の寺院では見られない光景です(写真右)。



総本山というだけあり、そこでは多くの僧侶たちが修行をしています。私たち大学の教職員は、まず天台宗で最も地位の高い高僧の方に、韓国式の五体投地で礼拝し、続いて3名ほどの僧侶の方々に挨拶をして、それ

それから新年の訓示をうかがい、2000ウォン（200円弱）ほどのお年玉をいただきました。これで初詣は終わりですが、挨拶をする僧侶の方はそれぞれ別の建物、別の房におり、私たちは階段を上り下りしながら、それらを移動して歩かなくてはなりません。昼食も含め、すべてが終了し、寺を後にしたのは午後2時頃でした。寒さと疲労で帰路はぐったりしていたのですが、韓国天台宗の一面を知ることができる興味深い体験でした。

林 香奈(仏教会会員 金剛大学校仏教文化研究所 HK 研究教授)

～タイの仏教事情⑩～

―パーリ仏典のタイ語翻訳作業と出版の歴史と現状―

前号では、タイにおけるパーリ仏典の書写・出版の歴史について紹介しました。今号からは、パーリ仏典のタイ語翻訳作業と出版について触れてみたいと思います。

まず、パーリ三蔵経のタイ語翻訳は、スコータイ時代・アユタヤ時代より、現ラタナコーシン時代まで盛んに行われてきました。特に、ラーマ3世の時代（1824～1850年）には、多くの経典が訳出されました。しかし、それまで翻訳された経典は、古語で書かれ、更に未翻訳の経典がいくつか残り、全訳の完成に至りませんでした。

この状況は、ラーマ8世（1935～1946年）の時代までに続きましたが、1940年当時の僧王（ティッサデーヴォー、1856～1944年）によって、一般のタイの人々でも三蔵経を理解できるように、また、仏教国としてパーリ三蔵経の現代語全訳を完成させるべきだと提案しました。ラーマ8世王は、その提案を受け入れ、パーリ三蔵経全訳の支援を引き受けるようになりました。翻訳作業をする際、僧王は委員長として、パーリ語を熟知した多くの長老・大長老を集め作業を監修しました。底本は、ラーマ5世の時代に刊行されたサヤムラッタ版でした。翻訳は2種ありました。1) 本として出版するために、意識を重視した訳。2) 写本に書写し、説法用にするための訳。作業は、1940年の年末に始まり、翌年には、律蔵・経蔵・論蔵のそれぞれの代表の翻訳書として1巻が完成し、それらを国王の誕生日のお祝いとして王に献上しました。その後、作業が進み、最初の全訳がラーマ8世王の時代に完成しました。しかし、1946年にラーマ8世王が他界すると、書写と出版の作業が一時中止されることになってしまいました。ラーマ9世が即位すると、作業は再開され、80巻というタイ語訳三蔵経の出版が1956年に完成しました。当時、仏暦2500年を迎えた年であったため2500部が出版されました。その後、サヤムラッタ版の巻数に合わせて、1971年に45巻となり再出版されました。それ以降、文部省の宗教課により、第4版まで刊行されています。

1987年にラーマ9世王の還暦のお祝いをするために、パーリ三蔵経の編纂会が行われました。この編纂会は、3回開催され、編纂会で校訂されたパーリ三蔵の原文を底本にし、旧版の不適當な訳語を修正しました。また、編纂の成果として、サンギーティ版というタイ文字パーリ三蔵とそのタイ語訳を公刊しました。

このように、タイでのパーリ三蔵経及びその翻訳の刊行は、時代を経て数人の国王の支援を受けて完成しました。その後、2ヶ所の仏教教育機関といくつかの機関によって公刊された三蔵経とその註釈のタイ訳が続々と完成されています。これについては次号送りにしたいと思います。



タイ語訳のパーリ三蔵

プラチャップン (Phramahāchatpong Katapuñño)

大学院仏教学専攻博士後期課程3年

～コラム「日本文化と仏教」⑭～

「今様狂い」後白河法皇の言い分

仏教会会員 作家 永田道子

NHK 大河ドラマ「平清盛」では当時の今様(いまよう)を歌詞にしたテーマ曲が使われている。

「遊びをせんとや生まれけむ、戯(たはぶ)れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動(ゆる)がるれ」

今様は当時の流行歌で、おもに白拍子や遊女が宴席の余興で歌った雑芸の一種である。この頃、田楽や猿楽などの庶民の雑芸が上流貴族の生活にも入り込み、催馬楽や朗詠に比べて自由な表現の今様が盛んになっていた。むろん旋律やメロディがどういうものだったか、現在は不明である。

この今様に異常なほどのめりこんだのが後白河法皇(1127～92年 在位 1155～58年)だった。鳥羽天皇第四皇子に生まれた彼は、皇位継承とは無縁の気楽な立場だったから、「イタクサタダシク御遊ビナドアリ」(慈円『愚管抄』)と評されるほど、遊興に明け暮れる生活を送っていた。周囲には常軌を逸したものと映ったとみえて、鳥羽上皇は「即位の器量ではない」(『愚管抄』)とみなしていたが、異母弟の近衛天皇が急死したため即位。しかしそれで素行があらたまるかどころか、ますます今様狂いに拍車がかかった。遊び相手には側近の公家たちの他、京の男女、端者(はしたもの)、雑仕(ぞうし)、江口・神崎の遊女、傀儡子(くぐつ)など幅広い階層におよび、ことに乙前という名人に心酔してしばしば宮中にまで呼び入れて教えを請うたほどで、彼女が八十四歳で亡くなったときには深く悼んだ。

その後白河が後年、習い覚えた今様を後世に残すために収録したのが『梁塵秘抄』(りょうじんひしょう)で、同口伝集の中で彼自身、その執著ぶりを事細かに書き記している。

「そのかみ十余歳の時より今に至る迄、今様を好みて怠る事なし。遅々たる春の日は、枝にひらけ庭にちる花を見、鶯のなき時鳥の語らふ声にも其の心をえ、せうせうたる秋夜、月をもてあそび、虫の声々に哀をそへ、夏は暑く冬は寒きを顧みず、四季につけて折を嫌はず、昼はひねもすうたひ暮し、夜はよもすがら唄い明さぬ夜はなかりき。夜は明れど戸藪をあげずして、日出るを忘れ日高くなるをしらず、其声をやまず。大方夜昼をわかず、日を過し月を送りき。其間人あまた集めてまひ遊びて歌ふ時もありき。四五人七八人男女ありて、今様ばかりなる時もあり、常にありし物を番におりて、我は夜昼相ぐして歌ひし時もあり。又、我ひとり雑芸集をひろげて、四季の今様、法文、早哥(はやうた)に至る迄、書きたる次第を歌ひ尽す折もありき。声をわる事三ヶ度なり。二度は法の如くうたひかはして、声の出るまで歌ひ出したりき。あまりせめしかば、喉はれて、湯水通ひしもすぢなかりしかど、かまへてうたひ出しき。或は七八五十日、もしは百日の哥など始めて後、千日の哥も歌ひ通してき。昼はうたはぬ時もありしかど、よるは哥を歌ひ明さぬ夜はなかりき。(中略)かくのごとく好みて六十の春秋を過しにき。」(『梁塵秘抄口伝集』巻十 以下同)

歌いすぎて声が出なくなったことが三回あり、そのうち二回は喉が腫れて湯水を飲むのもつらかったというのだからもはや異常の域だが、しかしただの酔狂な趣味人かといえばそうではなかった。退位して院政をしいてからは権謀術数をめぐらして平清盛をさんざん翻弄し、清盛をして「思いのままにならぬのは賀茂川の水と後白河の天狗」といわしめたほど、複雑怪奇で陰影の濃い人物であった。

『梁塵秘抄』と同口伝集は残念なことに散逸して、現存しているのは一部だけだが、庶民の生活感情をいきいきと歌った俗謡の他、仏教や神に関する歌が案外多いのが特徴である。彼自身の弁によれば、

「神社に参りて今様歌ひて、示現をかぶること度々になる。いちいち此事を思ふに、声たらずしてたえなる事なければ、神感あるべき由をぞむせず。唯年頃たしなみ習ひたりし功の致す所か。又ことに信をいたして歌へる信

力の故か。おほよす今様を好む事四十余年の功の致す。(中略)心をいたして神社仏寺に参りて歌ふに、示現をかうぶり、望む事叶はずといふことなし。つかさを望み、病をたち所にやめずといふ事なし。」

自分が心を込めて(自己陶醉して)歌うとしばしば神仏が示現して利益をもたらしてくれ、望みはすべて叶う。これは四十余年の長きにわたってひたすら没頭して熟達したおかげであって、未熟な者には神仏の感応などあるべくもない、というのだ。たいした自信である。

抄中の法文歌を少し挙げてみよう。

「仏は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ暁に、ほのかに夢に見え給ふ」(巻二 26)

「弥陀の御顔は秋の月、青蓮の眼(まなこ)は夏の池、四十の歯ぐきは冬の雪、三十二相春の花」(同 28)

「薬師医王の浄土をば、瑠璃の浄土と名づけたり、十二の船を重ね得て、我ら衆生を渡いたまへ」(同 33)

「瑠璃の浄土は潔し、月の光はさやかにて、像法転ずる末の世に、普く照らせば底もなし」(同 34)

「普賢薩埵は朝日なり、釈迦は夜昼身を照らし、昔の契しありければ、達多は仏に成りにけり」(同 35)

「観音大悲は舟筏、補陀落海にぞ浮かべたる、善根もとむる人しあらば、乗せて渡さむ極楽へ」(同 37)

「南天竺の鉄塔を、龍樹や大士の開かずば、まことの御法を如何にして、末の世まで弘めまし」(同 41)

「龍樹菩薩はあはれなり、南天竺の鉄塔を、扉を開きて秘密教を、金剛薩埵に受けたまふ」(同 42)

「真言教のめでたきは、蓬窓宮殿隔なし、君をも民をも押しなべて、大日如来と説いたまふ」(同 45)

経典を材にしたものもある。

花厳経「花厳経は春の花、七所八会の苑ごとに、法界唯心色深く、三草二木法(のり)ぞ説く」(巻二 46)

阿含経「阿含経の鹿の声、鹿野苑とぞ聞ゆなる、諦縁乗の萩の葉に、偏真無漏の露ぞ置く」(同 47)

方等経「大集方等は秋の山、四教の紅葉はいろいろに弾呵法会は濃くうすく、随類ごとにぞ染めてける」(同 49)

般若経「大品般若は春の水、罪障氷の解けぬれば、万法空寂の波立ちて、真如の岸にぞ寄せかくる」(同 52)

無量義経「無量義経に苔む花、靈鷲の峰にぞ開けたる、三十二相は木実にて、四十二にこそなりにけれ」(同 55)

普賢経「積れる罪は夜の霜、慈悲の光にたとへずば、行者の心をしづめつゝ、実相真如を思ふべし」(同 56)

この他、法華経に関するものはことに多く、二十八品歌百十五首というシリーズの他にも数多くある。

その後白河もさすがに晩年になると狂言綺語の罪業の重さを思い、来世のことが心配になった。

だがそこは希代の奇人帝王、『白氏文集』に「狂言綺語の過(あやま)ちを転じて……讚仏の因となさん」とあるのを盾に、堂々と開き直った。

「此今様をたしなみ習ひて、秘蔵の心ふかし。定めて輪廻業たらむか。我身五十余年をすごし、夢のごとしまぼろしの如し。既になかばは過にたり。今はよろずを投捨てゝ、往生極楽を望まんと思ふ。たとひ又今様を歌ふとも、などか蓮台の迎へにあづからざらむ。其故は、あそびのたぐひ、舟にのりて波の上に泛(うか)び、流にさをゝさし、きものをかざり色を好みて人のあひ念を好み、哥を歌ひてもよくきかれんと思ふにより、外に他念なくて罪に沈みて、菩提の岸に至らむ事をしらず。それだに一念の心起しつれば往生しにけり。ましてわれらはとこそ覚ゆれ。法文の哥、聖教の文に離れたる事なし。法花経八巻が軸々光をはなちはなち、廿八品の一々の文字、金色の仏にまします。せぞくもんじのごうひるがへして讚仏乗のいん、などか転法輪にならざらむ。」

世人が遊興や奢侈や色事にうつつを抜かし、歌でも人に褒められたいという邪念によって重い罪業をつくり、菩提に至ることなど到底できはしないのに、それでさえ念仏の一念を起せば極楽往生できるというではないか。まして自分が長年やってきたのは世俗文字の業を翻して讚仏乗の因なのだ。どうして転法輪にならぬことがあるのか。かならずや阿弥陀仏のお迎えがある。そう豪語している。

(岩波文庫版『梁塵秘抄』 新字に改めた)

《書籍・イベント情報》

○《書籍》

・『日本浄土教の世界』

竹村牧男/著 (大東出版社 2800円)

阿弥陀仏の大悲を頼りとして、極楽往生を目指す浄土教は、インドに誕生し、中国で発展、日本に根づいた。この身このまま無条件で安心に達すると説くにいたる日本浄土教思想の深化の過程を、源信、法然、証空、親鸞、一遍らの言行を辿り究明する。

・『曇鸞浄土教形成論—その思想的背景—』

石川琢道/著 (法蔵館 6000円)

曇鸞浄土教誕生の秘密を「北魏仏教」や般若系論書に求め「往生論註」研究に新時代を切り拓く書。

・『十三仏の世界—追善供養の歴史・思想・文化—』

渡会瑞頭/編 (ノンブル社 7800円)

真言宗豊山派現代教化研究所の所長・研究員を中心とした十三仏と教化についての論文19本をまとめたもの。

・『内モンゴル民話集』

オ・スチンバートル、バ・ムンケデリゲル/著 南雲智/編訳
トルガンシャル・ナブチ/訳 (論創社 2100円)

実在の人物がモデルといわれる愉快な「はげの義賊」の物語、モンゴルの英雄チンギス・ハーンにまつわる伝説ほか、数多くの民話が語り継がれてきた内モンゴル自治区・ヘシグテン地域。遊牧の民の心にふれる、おおらかで素朴な説話70編。

・『徳一と法相唯識』

白岩孝一 (長崎出版 2000円)

『解深密経』唯識論書などを祖上に在野の研究家が読み解く。徳一が学んだ唯識とは。

・『仏はどこにいるのか—マンダラと浄土—』

立川武蔵/著 (せりか書房 2520円)

歴史の中でブッダ(仏)は、当初修行者たちの師であり、次に救済者として極楽浄土に住む阿弥陀となり、さらにマンダラに住む大日如来となった。ブッダのイメージの変遷を辿り、世界認識の装置としてのマンダラと浄土の秘密に迫る。

○《イベント》

4月から7月にかけて行われる仏教イベントを紹介します。寒さが一変して穏やかな日が続いています。掲載したものを以外にも各地で大小様々な行事がありますので、暖かな日差しに身を任せてご参加下さい。

● 金峯山寺「秘仏本尊特別ご開帳」

金峯山寺の仁王門大改修勸進のため、本堂蔵王堂(国宝)の日本最大の秘仏本尊である金剛蔵王大権現(重文)を、今後十年間の毎年一定期間にご開帳する。金剛蔵王大権現は16世紀の作で像高7mを越す巨像として有名であり、拝観の機会は大変に貴重である。

日時: 3/31(土)~6/7(木)

8時30分~16時30分

拝観料: 1000円

住所: 奈良県吉野郡吉野町吉野山

● 東京国立博物館 140周年特別展「ボストン美術館 日本美術の至宝」

アメリカのボストン美術館に所蔵される日本美術品の中から厳選された仏像・仏画に絵巻、中世水墨画から近世絵画まで、約90点を紹介する。平安時代の絵画で三頭一体の象が支える普賢延命菩薩像や、曾我蕭白・長谷川等伯・尾形光琳・伊藤若冲などの手による、かつて海を渡った"まぼろしの国宝"とも呼べる日本美術の至宝が一堂に里帰りする。

日時: 3/20(火)~6/10(日)

9時30分~17時

観覧料: 一般1500円、学生1200円

※休館日は毎週月曜です。

● 龍谷ミュージアム特別展「仏教の来た道—シルクロード探検の旅」

インドで誕生した仏教は、ガンダーラ、西域、中国、朝鮮半島、そして日本へと伝わった。この「仏教の来た道」であるシルクロードを20世紀初頭に日本ではじめて学術的に調査した大谷探検隊がもたらした貴重な資料124件を紹介する。

日時: 4/28(土)~7/16(月)

10時~17時

観覧料: 一般1000円、学生700円

住所: 京都市下京区堀川通正面下る西本願寺前 龍谷ミュージアム

※休館日は毎週月曜です(ただし4月30日、5月21日、7月16日は開館する)。

〈特別講演会〉各回とも13時30分~15時まで、龍谷大学大宮キャンパス清和館3階ホールにて

(1) 5/6(日)「大谷探検隊の意義」上山大峻(龍谷大学元学長、龍谷大学名誉教授)

(2) 6/10(日)「ゾロアスター教とマニ教の世界観」吉田豊(京都大学大学院教授)

(3) 7/1(日)「シルクロードの仏教文化」山田明爾(龍谷大学名誉教授)

※講演会参加には事前申込が必要(E-mail、または往復ハガキ)ですので、HPをご確認されるか、直接お問い合わせ下さい。(電話: 075-351-2500)

● 浅草寺仏教文化講座 第677回

第1講座(午後2時)「夢に向けてチャレンジ~忍耐は苦しい、けれどもその実は甘い~」

マラソンランナー・流通経済大学客員教授 谷川真理

第2講座(午後3時)『日本霊異記』の世界

淑徳大学国際コミュニケーション学部教授 宇佐見正利

日時: 4/25(水)

13時開場

観覧料: 無料、予約不要

会場: 新宿明治安田生命ホール(新宿駅西口)

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。(会員は無料で参加できます。)

《語学勉強会》

○仏教漢文講読会

講師：橋川智昭

日時：隔週木曜 4限

『大乘起信論』を読みながら漢文の読み方と仏教の思想を学びます。参加希望者は橋川<kitsukaw@ff.iij4u.or.jp>までご連絡ください。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週水曜日の6限

『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。

○チベット文献講読

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～20:00

内容：ツォンカパの『ラムリム』「菩提心の儀軌」の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。

会場：インド哲学科共同研究室

参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

*＜語学勉強会＞は資料等の準備がありますので、参加希望者は各講師もしくは仏教会事務局宛まで、あらかじめご連絡下さい。

《各種研修》

○「仏教サンスクリット写本を訪ねて」展見学のお知らせ
11世紀法華経のサンスクリット貝葉写本や古ウイグル語「法華経観音経」写本などを閲覧します。

日時：5月2日(水) 13時～18時

場所：創価大学池田記念講堂ロビー(八王子市)

集合：東洋大学インド哲学共同研究室 13時

引率：渡辺章悟 仏教会会長

○「声明公演」

雲上の祈り～総本山長谷寺勤行～

真言宗豊山派迦陵頻伽聲明研究会による公演。

日付：6月2日(土)

時間：午後3時半開場 午後4時開演

場所：東洋大学白山キャンパス井上円了ホール

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ (<http://www.toyo-yimba.org>) をご覧下さい。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、このアドレスまでご一報下さい。

編集責任者：文学部インド哲学科4年 鈴木伸幸

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費 3000 円、特別賛助一口 5000 円

東洋大学仏教会事務局 長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室 気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費 1000 円

東洋大学仏教青年会会長 藤森晶子

db1000016@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>